

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	妹 尾 藍
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授） 清 田 哲 男 副主査：（兵庫教育大学教授） 初 田 隆 委 員：（岡山大学教授） 小 川 容 子 委 員：（上越教育大学教授） 松 本 健 義 委 員：（滋賀大学教授） 新 関 伸 也
3. 論文題目	色彩の感受に基づく表現が新しい価値に向かう態度に与える影響の研究
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 妹尾 藍 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和4年2月12日（土） 10時00分～10時30分 場所：ZOOMによるオンライン実施 1. 学位論文の構成と概要 序章 研究の目的と概要 第1節 問題意識／第2節 「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の両立 第3節 本研究における問題の所在／第4節 本研究における問題への手立て 第5節 本研究の構成 第1章 感覚知覚に基づく表現に関する本研究の位置づけ 第1節 本章の流れ／第2節 創造性の多様さ／第3節 創造性に関わる能力 第4節 学校教育で培う創造性について／第5節 本章でのまとめ 第2章 色彩の感受が鑑賞活動に与える影響 第1節 本章の流れ／第2節 色彩から想起される感情効果／第3節 本調査の目的と概要 第4節 色彩感情効果学習が鑑賞活動に与える影響の仮説／第5節 集計結果／第6節 考察 第7節 本章でのまとめ 第3章 色彩の感受が表現活動に与える影響 第1節 本章の流れ／第2節 本調査の目的と概要／第3節 仮説／第4節 集計結果 第5節 考察／第6節 本章でのまとめ 第4章 色彩の感受と色彩への理解が表現活動に与える影響について 第1節 本章の流れ／第2節 調査aの目的と概要／第3節 本調査aでの仮説 第4節 本調査aの概要／第5節 集計結果／第6節 考察／第7節 調査aでのまとめ 第8節 調査bの目的と概要／第9節 調査bの仮説／第10節 調査bの集計結果／第11節 考察 第12節 本章でのまとめ

第5章 多感覚による知覚が色彩での表現活動に与える影響

第1節 本章の流れ／第2節 本調査の目的と概要／第3節 仮説

第4節 調査の結果と考察／第5節 本章でのまとめ

第6章 新しい価値に向かう姿勢と造形行為の関わり

第1節 本章の流れ／第2節 創造性の測定方法に関する問題／第3節 本調査の流れ

第4節 第1次尺度のながれ／第5節 第1次尺度の作成

第6節 第1次尺度の調査結果／第7節 第1次尺度に関する考察

第8節 第1次尺度の成果と課題を踏まえた今後の展望

第9節 第2次尺度の作成に至るまでの経緯／第10節 調査結果／第11節 考察

第12節 本章でのまとめ

第7章 「mini-c」と色彩学習の相関性について

第1節 本章の流れ／第2節 調査の目的と流れ／第3節 仮説／第4節 調査結果

第5節 考察

終章 本研究のまとめと結論

第1節 各章での結果からのまとめと結論の方向性／第2節 本研究の結論

第3節 これからの研究

<本論文の概要>

本研究は、筆者の所属校において、Huntが述べた学習への内発的動機付けを促す「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」が並列な関係として存在するという主張とは相反した状況だったことを発端としており、生徒自身が、社会生活を送る上で自分の意見を表出にくい状況にあることを問題（リサーチ・クエスチョン）としている。

この問題に対して、本研究においては二つの課題を追究している。一つめの「課題①」は、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の視座からの造形行為を行うようになる学習プログラムの開発と検討である。もう一つは、「課題②」として、開発したプログラムによって、生徒が新しい価値に向かう態度が高まっているかを測る尺度の開発とその検証である。

第1章は、本研究の課題を達成するために必要となる色彩の感受と、創造性に関する先行研究から、本研究の位置づけを示している。

第2章は、絵画鑑賞で「知覚と環境の相互作用」を促す色彩からの感受に重きを置いた色彩感情効果学習を行い、絵画作品の主題に関する記述の語句の種類等からの調査と検討である。結果として、色彩の感受を繰り返す学習活動は、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の二つの視座から、絵画鑑賞をするようになる効果を明らかにしている。

第3章は、色彩の感受に重きを置いた学習プログラムが、表現活動においても有効であるのかの調査と検討である。結果として、色彩の感受による学習によって、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の両方を基にした表現主題に向かい、その態度が持続する効果があることを明らかにしている。

第4章は、「知覚と環境の相互作用」だけでなく、色彩についての知識を習得する「情報処理と行為」に基づく学習が造形行為に与える影響について二つの調査と検討である。

一つ目の調査（以下、調査aと表記）は、生徒が色彩の感受もしくは色彩の知識習得だけを経験する影響の検討である。調査aの結果から、色彩の感受のメリットは、表現主題から多くのことを想像し、多様な表現に向かう姿勢を強める効果があることで、デメリットは、自分の感覚とはそぐわない色は使わないままになることである。色彩の知識習得のメリットは、知識を活用して多くの色数を用いて表現する効果があることで、デメリットは、想像することからの作品の表現主題が弱くなることである。

もう一つの調査（以下、調査bと表記）では、二つの学習の順序性が与える影響の検討である。結果として、色彩の感受から経験することは「知覚と環境の相互作用」から多くのことを想像し、「情報処理と行為」を行って様々な色や技法を用いて表現に向かう姿勢を高める効果があることと、二つの学習プログラムのデメリットを補うことを明らかにしている。

第5章は、視覚のみの学習プログラムと、視覚以外の感覚を相互作用させて色彩の感受する学習プログラムを実施し、生徒の制作状況の調査と検討である。結果として、相互作用させるために視覚以外の感覚を加えた学習プログラムでは、触覚、聴覚、嗅覚に応じて想像する内容が多様に変化するようになり、言葉ではなく、造形で表す姿勢を高める効果があることを明らかにしている。

第6章は、個人にとっての新しい価値に向かう「mini-c」が培われているのかを検証する尺度の作成である。その上で、地域が異なる複数の中学校でのアンケートを実施し、調査結果とカリキュラムの関係から作成した尺度の妥当性を確認している。

第7章は、創造的態度尺度と生徒の作品の制作状況との相関性を調査と検討である。結果として、色彩の感受に重きを置く学習プログラムを繰り返し経験すれば、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」が両方を意識して表現されるとともに、新しい価値に向かう態度も強まるようになる傾向が見られることと、自分にとっての美しさを求めることで、新しい価値に向かう態度を自身で育てやすくなる傾向を明確に示している。

以上の調査を踏まえことから、課題①と課題②に呼応する、以下の2点の効果があることを確認し、本研究の結論としている。

- ① 「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の両方の視座を持って表現活動、鑑賞活動に向かうように育むための一つの方法として、色彩の感受が有効である。
- ② 色彩に関する本学習プログラムの経験し、かつ、自分にとっての美しさを求める生徒ならば、新しい価値へ向かう態度を強める効果がある。

2. 審査経過

審査に先立ち、9時00分から10時00分に公聴会をおこない、審査委員全員が論文の発表を聴講して質疑応答がおこなわれた。その後の審査会では、主に以下の点について、質疑応答、協議が行われた。

（1） 研究の目的と論文構成との整合性について

本論文は、問題意識として、鑑賞時の生徒の感想や意見が、感受による主観的な言葉でなく、客観的な情報のみである場合が多いことを挙げ、その解決のため、他の造形要素と比較し、より主観的に関わりやすい色彩の学習活動に注目した。そして、解決に向けての課題を、色彩学習の多様な学習プログラムでの生徒の活動の様子から、色彩学習と、生徒の感受への影響との関係を明らかにする二つの課題を設定している。最終的にこの二つの課題に対して呼応する結論を導いていることから研究目的と論文構成の整合性が認められた。また、課題達成の手法として、生徒の課題発見・課題解決を重層的に積み重ねられながらプログラムや検討を進化していく研究の在り方が、今後の新しい研究手法の可能性を示すものとして評価された。

（２）研究の独自性について

学習者の感受と学習効果を対象とした研究で、色彩学習の実践的研究の検討に絞った視点はこれまでの日本の美術教育研究では見られなかった視点である。そのため、海外の研究事例から、色彩学習をカラーシステムでの学習と色彩感受の学習とに分類し、それぞれの学習活動で生徒ごとの学習プロセスや言葉の変動を比較することで色彩感受の学習効果を明らかにしようとした。また、小さな研究課題をいくつか設定し、それぞれの課題で明らかになった点と、不明な点を明快に示し、不明な点については次の課題で追究する研究手法によって、長期カリキュラムでの色彩学習効果のデータ収集も可能にし、長期間の学習効果の持続性についても検討を行ったことも独自性として認められた。

（３）今後の発展性について

博士課程での研究では色彩の感受、つまり、視覚からの感受を中心に論じているが、今後の研究全体のテーマは感受と表現との関係を明らかにすることにある。そのため、本論でも一部、色彩の感受と触覚や聴覚との関係も触れているが、今後、調査対象を形態やテクスチャー等、色彩以外の造形要素も加えることや、多感覚による感受の研究への広がりにも期待できる研究手法であった。さらに、今回の調査対象は中学生であったが、今後他の年代についても調査への可能性も示唆されている。これらのことから、今後、複数の感覚器官による感受と長期にわたる学習効果の調査等、多面的な研究が期待できる。

（４）学校教育の実践への貢献について

本論文の課題は美術教育の授業で感じ取った問題意識から生成され、結論として纏められた二つの効果もまた、美術教育の授業での生徒の言葉や作品等の検討から明らかにしたことである。また、主要な造形要素の一つである色彩の学習経験と、感受性や豊かな日常を思考する意欲との関りを追究する過程で作成された長期的な色彩学習カリキュラムは、他中学校との共同研究で構築されたものであるため、将来一般化や、広く汎用できる基礎モデルとして期待できる。さらに、第6章で示された尺度についても、調査だけでなく、生徒の感受による表現、鑑賞活動を観察する視点として活用できる可能性も示唆されている。以上により、本論文は、学校教育実践へ貢献する成果として認められ、今後の学校教育学、美術科教育学の発展に寄与する論文であると言える。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 妹尾藍 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。